第 57 回

コンチェルティーノ・ディ・キョウト
定期演奏会

57th Concertino di kyoto

主催　スズキメソード京都

2015
11.28（土）
18:30開演

京都コンサートホール
小ホール

J.S. バッハ

フーガ 二短調 BWV680

F. ジェミニアーニ

ラ・フォリア

田﨑　祐成（Vn）　和田瑛怜奈（Vc）

J.S. バッハ

オーボエとヴァイオリンの為の協奏曲 二短調 BWV1060R

中山　房子（Ob）　村山　直（Vn）

W.A. モーツァルト

弦楽四重奏曲 第21番「プロシャ王第1番」二長調 K.575

コンチェルティーノ・ディ・キョウト　指揮　江村　孝哉

Violin	村山　直	西辻　友結	新開つぼみ
	田﨑　祐成	吉村　真綾	守田　乙葉
	林田　菜月		
Viola	江村美由紀	佐々木めぐみ	仲佐　悦子
Cello	和田瑛怜奈	森田　健二	
Bass	野々口真実		
Cembalo	永田　悦子		

中山　房子（オーボエ）

同志社女子大学学芸学部音楽学科演奏専攻卒業。同志社女子大学音楽学会≪頌啓会≫特別専修生修了。ドイツ国立マンハイム音楽・芸術大学ディプロムコース（学士課程）を卒業しディプロムを取得。ドイツ国立ヴュルツブルグ音楽大学大学院にて研鑽を積む。ドイツバーデンバーデンフィルハーモニーの常任アシスタントを務める。2007年に帰国。これまでにザ・シンフォニーホールにて大阪朝日新聞社主催「朝日推薦演奏会」、いずみホールにて「いずみホールスプリングコンサート」、2007年4月に姉和子との初のデュオリサイタル「中山和子・房子デュオリサイタル」を行う。2008年1月にはNHK-FM「名曲リサイタル」に出演する。オーボエを清水明、故岩崎勇、インゴ・ゴリツキ、新井伸久、ヨッヘン・ミューラー・ブリンケン、室内楽を岩崎勇、パウル・ダン（ピアニスト）、ウーリッヒ・フロインド（ファゴット奏者）の各氏に師事。現在は中山和子・房子「ピアノ・オーボエデュオ」、アンサンブル「NIKO ニコ」その他室内楽・オーケストラなどのフリーランスとして活動中。奈良県立高円高校オーボエ講師、奈良天理音楽院講師、関西現代音楽交流協会会員。

曲目解説

バッハ　フーガ　BWV680

「クラヴィーア練習曲集」第3巻の中のひとつで、教会で演奏されるルター作によるコラール「われら皆唯一なる神を信ず」によるミサ曲。バッハ初の出版楽譜として発売されたこの作品が生まれた背景には、音楽の新時代の到来があった。18世紀初頭、それまで宮廷か教会に限られていた芸術音楽が、特権階級以外の市民にもひろがっていき、バッハが活躍するライプツィヒの街でも市民オーケストラが市民向けに演奏会を行い家庭にもチェンバロなどの楽器が普及しはじめ、楽譜出版社が誕生。そんな市民や自分の弟子の為にバッハが出版楽譜に選んだ題材が、チェンバロなど鍵盤楽器の練習曲集であった。先端の演奏技術と今まで培ってきた音楽を凝縮させたこの曲は、現在でもよく演奏されるバッハの代表作のひとつになる。第1巻（1731年）は「パルティータ6曲」、第2巻（1735年）は「イタリア協奏曲 BWV971＆フランス風序曲 BWV831」、第3巻（1739年）はオルガン曲（ドイツ・オルガン・ミサ＝教理問答書コラール BWV669-689 など）、第4巻（1742年）は「ゴルトベルク変奏曲」。

ジェミニアーニ　ラ・フォリア

「フォリア」とは、元来ポルトガル起源で 17 世紀イタリアで流行したもともとは騒がしい踊りのための音楽であったが、時代を経て優雅で憂いを帯びた曲調に変化したサラバンド風のゆったりした舞曲。コレルリにより作曲されたこの曲は、16 小節の主題と 23 の変奏からなり、ヴァイオリンと通奏低音のために書かれた。コレルリは寡作ではあるものの、教会ソナタと室内ソナタを明確に分け、合奏協奏曲の形式と様式を整え、またヴァイオリンの旋律性や音色を最大限に引き出す完成度の高い作曲法や演奏テクニックが、バッハ、ヴィヴァルディ、タルティーニ、ヘンデルなど後代までヨーロッパ中に影響を与えた。ジェミニアーニはその弟子のひとりでイギリスに渡って活躍した。

バッハ　オーボエとヴァイオリンのための協奏曲

この曲のオリジナルの楽譜は消失したため、作曲家自身の編曲した「2 台のチェンバロのための協奏曲」の楽譜からから 1920 年頃に元の曲を復元したもので、今では「オーボエとヴァイオリンのための協奏曲」で演奏されることが多い。18 世紀初頭、テレマンにより学生・アマチュア愛好家を中心に組織された“ライプツィヒコレギウム ムジクム”でバッハは 10 年余り指揮した。そこでは、教会音楽とはまた別の、ヴィヴァルディ、アルビノーニらの作品に加えて自作の器楽曲等も発表し演奏した。

アレグロの両端楽章は、それぞれの楽章で展開される様々な要素の大半が、最初のリトルネッロ（トゥッティ）に含まれていて緊張感が高く求心的である。第 1 楽章は、ニ短調とハ長調という 2 つの調が最初の 4 小節間で対置され、以後の展開の中では、長調と短調が頻繁に入れ替わるという他の作品にはあまり見られないものである。終楽章はテンポの速い軽快な曲想が特徴的で、2 つのソロ・パートの対話と共に、ソロ楽器対オーケストラの対話も聴きものである。

モーツァルト　弦楽四重奏曲 第 21 番「プロシャ王第 1 番」

何世紀もの間、芸術家はパトロンに仕えることで生計を立てていて、注文を受けて書かれたものが多い。モーツァルトは 1789 年にドイツを旅行し、ベルリンにおいてプロシャ王フリードリヒ・ヴィルヘルム 2 世の御前で演奏する機会があった。その際にモーツァルトはチェロの名手でもあった王から 6 曲の弦楽四重奏曲と、シャルロッテ王女のために 6 曲の易しいピアノソナタの作曲を依頼されたといわれる。ウィーンに戻った後、モーツァルトは作曲にかかったが、結局完成したのは弦楽四重奏曲が 3 曲（プロシャ王）と、ピアノソナタ（K.576）が 1 曲のみであった。その王の腕前が存分に発揮できるように第二ヴァイオリンとヴィオラは後ろへと退き、それらをバックにしてチェロが思う存分に活躍するように書かれている。